

夢 想

「お聖人さま。私は、昨夜夢をみました」

「ほう、どんな夢であつたなあ。私なぞは、つい夢をみたこともないが」

「聖人に夢なしと申しますから、お聖人さまは夢をみないのであります」

「はつはつ……」

聖人は豪快に笑われた。

波の音がまじかにきこえる。伊豆伊東の玖須美の聖人の流罪の草庵である。

川奈の弥三郎の使いの者といつわつて、聖人に毒茸を献じたものがあつたが、聖人の身体には何等変おつたこともなかつた。かえつて毒茸を献じたものは、弥三郎に約束した通り、聖人のつがえないのをみて驚くと同時に、思わず南無妙法蓮華経と唱えて、念仏を捨てたのである。

それから、幾日かたつたある日のことである。聖人は、弟子の日興と、なごやかに対談せられておられた。

「お聖人さま、昨夜の夢というのは、沖の方から白装束をした老人が不思議なことに、海の上

を歩いてまいりました。そして浜辺に立つておるこの日興に、近く御赦免になりますぞというのでございます。では何時頃でございましょうかと、尋ねたのでございますが、不覚にも眼がさめてしまいました」

「それはおいしいことであつた。日興、お前の口から御赦免の日は何時の何日ですと、ききたかつたぞ、この日蓮は……」

「おそれいます。何分にも夢のことでございますので……」

「夢寐にも忘れぬということがあるが、日興、お前の師匠を夢にも忘れぬその心が、そのような夢をみせたのであろう」

「は、いっ」

日興は師匠からほめられて、思わず顔を赤くしながら、つぶらな眼で、師匠たる聖人の温顔をあおぎみるのであつた。

「信心というものは、自分では深く信心しておるようでも、その信心のどあいというものは、一寸わからないものである。それで、夢の中でも、信心を一生懸命しておるようならば、その人は本当に信心をしておるといふことができるのだ。日興の昨夜の夢は、法華信心のあらわれ、師を思う弟子の真心のあらわれとこの日蓮は思うぞ、ありかたいいことだ」

「何時の何日ときき洩らしたのが、日興の不覚でございました」

「日興つ、何時の何日とは、この日蓮が申し聞かせよう」

「ええつ、では、お聖人さまも夢をみられましたか……」

「はっはっ……」

聖人は日興の顔をみて、笑われた。

「私は、先程、お前にいった通り。その夢はみておらない。だが、たいていのことは、胸中の鏡に映るぞ」

「では、何時頃でございましたうか」

「それはなあ」

聖人は、日興の前に眼をつぶられたが、断言するようにいわれた。

「今年、弘長二年もあと二カ月でくれてゆく、あと四カ月後には、この日蓮も鎌倉に帰るであろうよ」

「すると、来年の二月頃でございますか」

「さよう、その時分であろうなあ」

聖人を伊豆の伊東へ流したのは北条重時である。重時は極楽寺をたてて、隠居するという程の念仏の信者であった。その子息は鎌倉で政治をとっていた執権職北条長時である。立正安国論の中には、念仏宗や禅宗を信心しておると、北条一家の親戚中に争いが起り、ついには、日本国が

よそから攻められるようなことが起ると書かれてある。重時が怒ったのも無理がない。立正安固論を献上した聖人は四十日後には松葉谷の御自分の家を襲撃されて焼き払われてしまった。これは主として念仏門徒のはからいであつた。執権職の父親が、寺までたてる念仏の帰依者であつたので、こんなことが起るのも当然であつた。ところが、その聖人が、焼き殺されもしないで生きておつた。こんなことは、念仏門徒にとつてはまことに意外なことであり、けしからんことであつた。そこで、鎌倉における念仏者の筆頭人たる北条重時は、聖人に伊豆の伊東の流罪を、子供の執権職たる長時に命じたのである。一回の取り調べがなかつたのも、不思議ではない。聖人を取り調べれば、草庵の焼き討ちの事件にふれねばならない。このことについて聖人が御自分の筆で書かれている。つまりその夜、松葉谷の草庵の夜討ちした人数は数千人で、あたかも謀叛人を捕縛するような勢いであつたと、書きのこされておるのである。

聖人を問註所に呼んで、取り調べることになれば、聖人の口から、草庵焼き討ちの件についての取り調べが要求されるであらう。そうなつては、北条家が、聖人に取り調べられるようなものである。

こんな事情があつたから、聖人は辻説法の最中に役人にとりかこまれ、さつそく由比が浜から伊豆の伊東へ流罪という、日本流罪史にも類例のなし、取り調べぬきの流罪になつたのである。

考えてみれば、執権職としても、寝ざめのよくない流罪である。ところが、またまた事件が起

きたのである。

聖人を伊豆の伊東へ流したのは、弘長元年の五月十二日であるが、その伊豆において、翌月の十六日に謀叛人がつかまり、伊豆一円の騒動が起きたのである。

話は北条時頼にさかのぼる。

北条時頼は名君のごとく伝えられておるが、それは概評であつて、北条家の政権を維持するためには、相当手あらな手段もとり、この人がこんなことをしたのかしらと疑う程のこともやつておるのである。

Aの所領を時頼が召し上げて、Bにやつてしまった。AはBを非常に恨んだ。そこで、ある闇の夜に、Aは毒矢をもつて、Bを射ころしてしまった。時頼は当然Aを疑つた。しかし、証拠がない。そこで時頼は、Aの下人を呼んで、拷問にかけたのである。そして下人にいつてきかせるのには、お前の主人はもはや白状してしまつたのだから、かくしても無駄である。落ちよ落ちよとせめたのである。ところがその下人は大変に忠義な男で「私の主人はこのような拷問に恥をさらずのがいやであるから、罪をかぶつて死のうと思つて、白状したのであります。私は下郎の分際だから、拷問されても恥とは思いませんが、知らないことをなんで白状できましよう。私の主人が白状したというのなら、重ねて私を拷問しても無駄ではありませんか」といつたので、確たる証拠をつかむことが出来なかつた。

すると、時頼は、Aを呼んできとした。「お前がBを殺したことは、すでに下郎が白状をしまつたから、お前が犯人であることは間違はないと思うが、仔細のあることであろうから、事情によつては、命を助けてやろうから、ありていに申してみよ」といつたのである。Aは涙をながして「日ごろ、恨みがあつて、今は勘忍なりがたく、すきをみて射ころしました」云々と白状したのである。時頼きき給い、神妙に候、いかにも御前を申しとのえて見候はんとて、奥に入り給い、不便ながらも、天下の法令なれば力なし、Aは首をはねられ、Aの同類は薩摩濁硫黄が島に流され云々と書物にある。これを読んでなんだかいやな気がした。

取り調べの模様は今も昔もこんな調子で、ひっかけて、やるのであろうが、司法の末端したつばがやるのならともかく、天下の名君時頼が、じきじきにこんなことをするとは思わなかつた。ところが、このような卑劣な手段を用いたのが、まだ、ほかにもある。

時頼が、三浦泰村を滅亡させた手段である。時頼は三浦泰村と一度和議がととのつて、互いに兵をひいたが、次の日、和平の約束を一方的に破り、三浦方の不意をついてこれを滅亡させ、北条家の政権を維持したのであつた。

三浦の一族は二百七十六人、郎従家の子二百二十余人同時に腹をかつたが、翌日、実検をとげて、首を残らず由比が浜にかけ、三浦の一族のかけおち、逐電したものは、仔細を問わず召し捕るといふふれ書きをかかげたのであつた。

弘長元年の六月、伊豆一円の騒動とは、この三浦泰村の子供律師良賢が起した謀叛を指すものである。自殺した一族二百七十六人というのに、良賢はどこをどうのがれたのか、出家をして律師にまでなっておったが、時頼に対する恨みは消えず、長年、伊豆の山に入つて、修行をするとみせかけ、三村の譜代の郎従達の、子息末孫をここかしこに尋ねて、叛逆の計略をめぐらしておつたのである。

ちなみに律師という僧名を説明しておく、律師はその人数は初めには一人しか日本にいなかったという程高い僧位である。その後六人となり、十五人となつたが、鎌倉時代でも律師といえ、五位殿上人でんじょうびとに准ぜられ、公儀出仕には、從僧二人、中童子二人、大童子四人の從者を許された程の僧位である。かかる僧位にある律師の良賢が永年にわたつて三浦再興を思い続け、北条一門討滅の計画を伊豆において企てたが、不運なことにことが露見してしまつた。それは皮肉にも、自界叛逆の難は近くきたると千言した聖人を、伊豆の伊東へ流した翌月の六月のことであつた。もちろん良賢以下これに味方したものは首をはねられて、先代同様、由比が浜の潮風に首をさらしたのは無惨なことであつた。北条時頼は入道として、この時にはまだ生きておつたのである。

このように、北条家にとつては、伊豆方面は、三浦一族の子息末孫がすむという、油断のできぬ場所であつた。伊豆の伊東へ聖人の流罪を強く主張した重時は、還著げんじやく於本人おとうほんにんで、五月十二日か

ら、二十日もたたぬ、六月一日に発作が起り、何病ともわからず、病氣の時は、念仏よりも真言がよいと、さかんに真言の祈禱師をやとつて病氣平癒を祈つたが、法華経誹謗の罪がでて、四か月後の十一月三日に病死したのであった。

さて、重時の弟は政村といつて、一人の娘があつた。これが物の怪けがついて、あらぬことを口走るようになったのも、弘長元年の、聖人伊豆伊東の流罪後であつた。

弘長元年の十月十五日、あまりにも狂うので、修験者呼んで御祈禱をしたところが、物の怪が現われて、「私はお前のお父さんによつて、亡ぼされた、比企判官ひきはんかんよしかず能員の娘さぬきのつぼね讚岐局である。

恨みに恨みぬいて死に、今は大蛇になつて生まれかわつてきたが、頭に大きな角がはえて、火災かえんの如き熱さにがまんができない程である。身のおきどころもないような苦しみの身で、今は比企ひきが谷やう（鎌倉市中にある）の池の底にすんでおるのである。この悲しさ知らせんために、汝の娘の身体をかりたのである」といつて、今にも死ぬかと思つ程、娘は苦しむのであつた。

政村は大いに驚き、多額の金をつかつて一日のうちに、法華経一部をたちまちに書いて、讚岐の局の追善をいたし、若宮の僧正をたのんで、法華経の説法をしてもらつた。「説法の最中に、かの息女、苦しげに打ち臥して、舌を出し、唇をねぶり、身をもだえ足をのべて、ひとえに蛇身を現わす」云々と書物にあるが、法華経の功德によつて、やがて物の怪は退散したのである。

まことに法華経の功德はありがたいと、鎌倉中のこれをきく人びとは、感歎しないものはなか

つた。

重時の子供で執権職たる長時も、この法華経の、なみなみならぬ功德を耳にして感動したが、心の中では、その法華経の行者と称する日蓮を、伊豆の伊東に流しておくのも、なにか心ざわりであつた。

強く日蓮流罪を主張した父の重時も、聖人の罰にあつたごとく病死してしまつた。日蓮の流罪を赦免しても、もはや、文句をいう人がなくなつたので、父の一周忌が終わると、弘長三年二月に日蓮赦免のことが、発表されたのである。

